

May 8, 2014  
古山英二

## 経営倫理学という学問について

宮崎犀一・奥村茂次・森田桐郎編『近代国際経済要覧』（東京大学出版会）は大変便利な参考文献で、ちょっとした経済データ、特に数世紀に亘る長期的データを知りたいとき、私は今でもよく参照する。最終版は1981年、その後絶版となった。アマゾンの中古本市場で見ると、この書物には12,535円の値が付いている。中古本の市場価格は、その書物の文献的価値の指標でもあるようだ。

1. 『近代国際経済要覧』p.11に「世界生産指数1701～1971」というデータが載っている。元資料はロストウの推計によるもので、1913年の世界工業生産指数を100としたときの1701-10年の年平均値は0.53、これが1948年には274、1971年には950に増加している。約3世紀弱の期間に工業生産が1800倍に増加した訳だが、第一に挙げられる要因を、人類が熱機関という動力を手に入れた産業革命に求めるのが一般的である。もう一つの大きな要因としてAlfred D. Chandlerは、経営トップを頂点に置くピラミッド型の経営組織の確立があったことを、大著*The Visible Hand —The Managerial Revolution in American Business—*のなかで論証している。Chandlerはこの現象を「近代経営組織の確立」と表現している。書名の*Visible Hand*は、アダム・スミスの*invisible hand*をもじってつけたものであることは明らかで、「企業経営者が市場の意思に支配されることなく、自らの意思で自主的に企業行動を決めるようになった」ことを表現している。

2. 「見えざる手から見える手へ」の変化と軌を一にして、経営学—*business administration, school of business*—という高等教育の一分野が発達したことが指摘される。また、「近代経営組織の確立」を押し進めた産業的背景には、アメリカにおける鉄道建設の発達があり、その建設には莫大な資本力を必要とし、鉄道の安全運行には周到な組織上の工夫が求められた。こうした「必要」が母となって「株式市場の発達」、「法人企業という企業形態の制度化」、「近代経営組織の発達」が促進されたと考えられる。しかも、そうした工夫が、国家の主導に頼ることなく、民間企業の手によって遂行され、国家はそうした発展の主導権をとることなく、もっぱら制度上の法的整備に徹したことが、アメリカ資本主義の特徴と考えられる。鉄道建設に触発されて発達した「近代経営組織」はあらゆる産業分野に伝搬し応用され、第一次世界大戦を迎える頃には、アメリカ経済は世界最強の生産力を誇っていた。第一次世界大戦が1918年に終わり、ヨーロッパ諸国の経済力が低下する中、アメリカ経済は、国際市場では行くところ敵無しの快進撃を続け、国内市場では東部諸州から中西部、西部、そして太平洋岸へと、鉄道網の発達に後押しされつつ発展を続けた。当時のアメリカ経済界を支配した合い言葉に”Go West!”であったという。そして、”Go West!”の

かけ声に象徴されるような、「イケイケドンドン」的風潮と「目的のためには手段を選ばず」式の、目的論的自然観＝社会進化論＝Social Darwinism が蔓延し、「経営の目的は利潤の最大化である」といった好ましからざる一種のイデオロギーが、折しも発展過程にあった経営学—business administration, school of business—という高等教育の一分野を支配するようになったと見る事が出来る。(Tausch, Carl F., *Policy and Ethics in Business*, 1931 McGraw-Hill)

応用倫理学の一分野が、独立した academic discipline としてアメリカの大学で教えられるようになった背景には、経営学の普及と「好ましからざるイデオロギー」の浸透が存在したことを忘れてはならない。

3. 経営学は、企業の理論に関しては経済学に負うところが大きい。経済学は企業を一つの input/output process を行う主体 (entity) として概念化する。input を cost、output を revenue、input と output の差を profit と定義すれば、企業とは  $R - C = P$  である。変数は総て貨幣表示の物理量である。従って、この方程式を数量  $Q$  に関して微分すれば、 $dP/dQ = dR/dQ - dC/dQ = 0$ , 即ち、 $dR/dQ = dC/dQ$  を得る。経済学では、限界収入が限界費用に等しくなる点で企業は活動の均衡点を見だし、そのような均衡点で企業の operation が安定すると考える。もし収入曲線が最大値を持つような関数であれば、 $P$  が最大となる点で企業活動は均衡する、というのが経済学の企業論である。「企業の目的は利益の最大化＝maximization of profit である」とする考えは、経済学からの借り物と思われる。経済学では、”profit will be maximized when marginal revenue is equal to marginal cost”と考えるが、そこには目的論的な意味での profit maximization という発想は見られない。数学的表現として profit will be maximized と述べているに過ぎない。利潤の最大化を“企業の目的”と考えたのは、この理論を借用したときに business administration の論者達が犯した誤解であったように思われる。

4. 経営学が経済学から概念を借用したとき、もう一つ誤解をしてしまった。それはアダム・スミスが使った metaphor、invisible hand である。スミスは無神論者ではなかったがキリスト教信者でもなかった。いうなれば、スミスは理神論者＝deist であり、万物は自然の摂理に支配されていると考えていた。そして、自然の摂理は人間の心に self-love という基本的行動規範を植え付けているので、指導や強制を経なくとも、人間は self-love の指針に従う限り、そしてすべての市場参加者がその指針に従って行動すれば、市場の pre-established harmony が実現すると考えた。しかし、「見えざる手」の metaphor は、Social Darwinism を奉ずる経営学の論者達より次のように誤解されてしまった。

「人間は基本的に利己的である。しかし、利己的に振る舞うと、報復を招くこともあるので、ほどほどにしておかなければならない。特に完全な自由競争下にあつては、個々の企業は自己の意思のみで行動できないので、市場の規範に従わざるを得ない。市場の規範は、一般的社会規範と軌を一

にしている。つまり、“嘘をついてはいけない”、“他人を欺いてはいけない”といったたぐいのものである。市場が完全競争を貫いている限り、見えざる手が働いて、企業は倫理的行動を取らざるを得ない。しかし、invisible hand から visible hand に置き換えられると、つまり企業が自らの意思に基づき市場を支配するようになると、unethical behavior が企業を支配するようになる。そうなったときには行政的処置による規制が必要となる。」

4. 倫理感は、外部の力に強制されて生ずるものではなく、優れて意志的現象である。Karl Jaspers が簡潔に纏めているように、：“It must carry conviction for Westerners, Asiatics , and all men, without the support of any particular content of faith, and thus provide all men with a common historical frame of reference. The spiritual process which took place between 800 and 200 B.C. seems to constitute such an axis. It was then that the man with whom we live today came into being. Let us designate this period as the “axial age”. Extraordinary events are crowded into this period. In China lived Confucius and Lao Tse.....In India it was the age of the Upanishads and of Buddha....In Iran Zarathustra put forward his challenging conception of the cosmic process as a struggle between good and evil; in Palestine prophets arose: Elijah, Isaiah, Jeremiah...: Greece produced Homer, Parmenides, Heraclitus and Plato. ( Jaspers, Karl, translated by Ralph Manheim, *Way to Wisdom: an Introduction to Philosophy* :1951 Yale University Press, p.101-2)

中国、インド、西洋において、互いに communication を図ることなく独立に生じた文化的平行現象の謎は実証的研究によっては解明できない性質のものであるとヤスパースは考えたようだ。こうした平行現象の必然性が完全には立証できないからこそ偶然にみえるのだが、「枢軸時代」を設定することによって、その前後にわたる人類全体の世界史の解明が可能になるというヤスパースの主張にも一理あるように思える。その辺をテーマに、単に人間の精神上特筆すべき時代だというだけでなく、「枢軸時代」設定の意義を考える研究会を提案したい。

ヤスパースが定義する「枢軸時代」(die Achsenzeit) から啓蒙主義の時代を経て今日まで、確立されてきた倫理学説は大きく分けて次の三つに集約される：カントに代表される Deontology、ベンサムに象徴される Consequentialism、そしてアリストテレスが集大成したと考えられる Virtue Theory、これである。Confucianism に代表される東洋の倫理学説は、徳理論の範疇に入るであろう。そして、東洋、特に中国の古典的倫理学説は、理論的体系により組み立てられていると言うよりも、saying, maxim, proverb, aphorism, adage の一群として提示されているのが特徴である。

5. Business Ethics＝経営倫理学というコトバは、主として三つの意味に使われている：ビジネスにおける倫理；ビジネスにおける倫理を実現するための制度的仕組みの研究；そして、応用倫理学の academic discipline の一つとしての Business Ethics である。これら三つの意味が混同されて用いられているのが、我が経営倫理学会の実情である。

以上